

事例 7 針江^{しょうず}生水の里・川端^{かぼた}（滋賀県高島市新旭町針江地区）

概要

針江地区には、安曇川^{あどがわ}の伏流水が 1 日 3,500t 湧出している。この自噴する水を飲料や炊事といった日常生活に利用し、また、水を汚さないための工夫として、川端という水の文化が各家庭に今も残っている。川端が使われない時期もあったが、NHK の番組で取り上げられたことを契機に、川端や湧水が見直され、多くの家が川端を復活させている。川と生活が密着し、また、川端、川、琵琶湖という水の流れによって、生態系のバランスが保たれている。



川端

（出典：針江生水の里委員会 HP）

| | |
|-----------|-----------------------|
| テーマ | 伝統的な水文化の復活と利用による町の活性化 |
| 主体・キーパーソン | 針江生水の郷委員会 |
| 手法・技術 | 伝統文化の再考 エコツーリズム |

背景

針江地区には、比良山系を水源とする安曇川^{あどがわ}の伏流水が自噴し、各家庭がこの湧水を利用した、「川端」と呼ばれる古くからの生活用水がある。伏流水は約 200 年の年月を経て湧き出ており、生水（しょうず）と呼ばれている。2008 年には、環境省選定の「平成の名水百選」にも選ばれている。

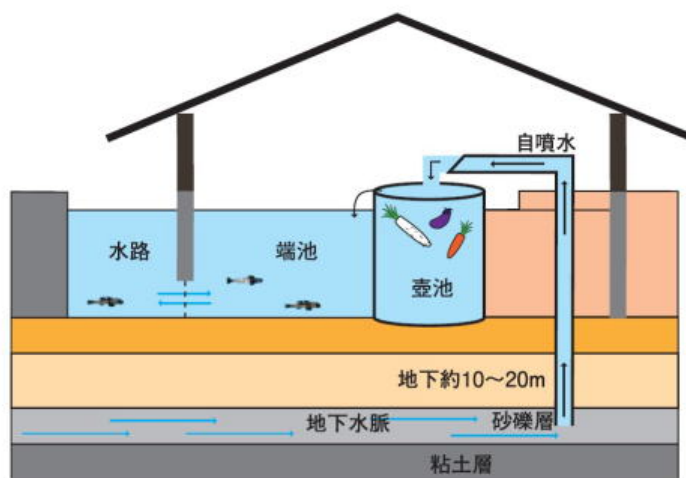
写真家の今森光彦氏の指揮、NHK の制作によるドキュメンタリー番組、「映像詩 里山～命をめぐる水辺」（2004 年放送）が、内外の注目を集めるきっかけとなった。この番組は、針江区在住の漁師の日常と川端によって育まれる生き物を描いている。世界で最も歴史と権威あるテレビ番組の国際コンクールの一つである「イタリア賞」で、最優秀賞を受賞している。番組を機に、エコツアーを運営するボランティア団体が設置される等の動きも出てきた。8 割の川端が使われていなかった状況が変わりつつあり、川端の文化が復活してきている。

取り組みの内容

1. 川端と生活

湧水を利用した、針江地区の家庭に作られた生簀のような水場で、起源は弥生時代とされている。現在、針江地区には 200 軒ほど家があるが、そのうち 100 軒以上の家庭に川端がある。川端には、地下水が湧き出る「元池」と、その周りに「坪池」、「端池」がある。一番きれいな元池の水は、飲み水や炊事に使い、坪池は野菜洗いや洗顔に使用される。端池では食器類を洗い、端池で飼われている鯉やニゴロブナ等が食器に付いた米粒を餌とするため、水が汚れない仕組みになっている。また、川端の水は、冬は暖かく夏は冷たい。初夏から初秋にかけ、天然の冷蔵庫として利用され、スイカやトマト等を冷やす光景が見られる。洗濯も端池や水路で行い、風呂やトイレの水にも利用している。地区内の豆腐屋、酒蔵でも湧水を利用する等、水と生活が密着した文化となっている。

各家庭の端池は集落内に張り巡らされた水路とつながっており、端池から針江大川、最終的に琵琶湖に流れ込む。水路や針江大川には、アユやビワマス等の希少淡水魚も遡上する。魚とうまく付き合いながら、水を大切に使う工夫が受け継がれており、「川上の人を信頼し川下の人を思いやる」「きれいな水を琵琶湖に戻す」という思いで扱われる（針江生水の郷委員会 HP より）。



川端の仕組み

(出典：針江生水の里委員会 HP)

2. エコツーリズム

NHK の番組放送を契機に、針江地区には多くの観光客が押し寄せ、無断見学や治安の不安といった問題が生じた。そのため、地区内の有志によって「生水の郷委員会」というボランティア組織が設立され、ガイドツアーの形で川端を案内している。活動メンバーの平均年齢は約 50 歳で、農家、サラリーマン、教師等で構成されており、プロはいない。地区住民で構成される正会員は約 70 名で、他に 100 名以上の協力者がいる。

ボランティアガイドが各家庭の川端とエコな生活の様子を案内する「川端と街並みコース」や琵琶湖沿岸の葦原の保存・在来種の魚を増やす取り組み等を見学する「里山湖畔コース」が用意されている。案内料金は、地域の環境整備・保全、水に恵まれない世界の子

どもたちへの寄付等に使われている。地元の伝統食の提供、朝市での地元農産物の販売も行う。また、生水の生活体験処もあり、川端のある生活を体験することができる。

この取り組みは、住民主体の組織として安定感のある活動実績が評価され、第 3 回エコツアーリズム大賞特別賞を受賞している。

3. 環境保全活動

川端から流れ出た水は、多くの生物を育みながら琵琶湖へと流れる。豊かな葦原が広がる湖畔には、鯉やフナ、うなぎ、ビワマス等、多くの在来種の魚が産卵のために集まることから、昔ながらの木の舟を使った伝統漁が行われている。

しかし、川の船着場では柳の枝が茂り、藻が繁茂し、浮遊ごみがたまるため、人の手で整備を行う必要がある。生水の郷委員会では、藻刈りや葦原整備を委員会単独で、または行政と協力して行っている。地域環境保全行事はイベント化され、地区外からも参加者を募っている。

また、集落でも、年に数回、水路の水を抜いて土砂やごみをさらう大掃除を行っている。藻刈りは住民が総出で行い、刈った藻は回収せずにそのまま下流に流し栄養分になっている。

洗濯をする際、以前は石鹼洗剤を水路では使用していたが、2006 年頃からぬかで洗濯が行われるようになってきている。これは地区外の人からの指摘により、生水の郷委員会によって石鹼洗剤の使用が禁止されたためである。



水路をふさぐ藻を刈り取る作業。2t ダンプカー15 台分を搬出した
(出典：針江生水の郷委員会 HP)



清流に生息する梅花藻はいかもが自生する
(出典：旅と散策 HP)

4. 豊かなむらづくり全国表彰事業

豊かなむらづくり全国表彰事業とは、農林水産業の振興、生活環境の改善、地域文化の継承等、地域ぐるみで取り組まれているむらづくりの優良事例を表彰する事業である。針江地区は 2006 年度に、豊かなむらづくり全国表彰事業の農林水産大臣賞を受賞している。

針江地区では 1989 年に県の有機活用事業に取り組んだことをきっかけに、針江有機米グループ（現針江げんき米栽培グループ）を結成している。グループでは 5 年ごとに土壌分析を行い、その結果に基づいて土づくり資材の種類と使用量を決定したり、農薬散布を雑

草対策として 1 回にとどめたりと、環境にやさしい農業を行っている。前述の針江生水の郷委員会の活動とあわせて評価を受け、受賞した。

成果と課題

川端そのものが、2 千年前から続くエコシステムである。針江大川は水源の 7 割が川端からの湧水になっており、鮎やハヤが泳ぎ、清流にしか生えないといわれる梅花藻の群生がある。外来種や温暖化等の影響で減少しているとされる琵琶湖の固有種、セタシジミも針江集落では生き延びている。2010 年 5 月には、国の文化審議会が「高島市針江・霜降の水辺景観」を重要文化的景観に選定するよう文部科学相に答申している。

メディアで取り上げられてきたこともあり、現在では年間 7 千人を超える見物客が国内外から訪れている。一時期、川端にふたをし、水道のみが使われることもあったが、2009 年には数十年ぶりに新しい川端が作られ、川端文化が見直されてきている。また、川端が使われなくなると同時に水路にごみが捨てられるようになっていたが、外部の人間が訪れるようになってからは、地域住民がごみを拾うなど、意識が変化してきている。土地の価値が見直され、生きがいができたと言う人も増えている。

観光名所としてではなく、勉強する場、癒しの場としての名所づくりをまちづくりのコンセプトにしている。活動における課題は特にないほど順調である。また、活動参加者への報酬は、高島市の加盟店で使用できる地域通貨^{あいか}愛貨で支払うため、地域経済への効果も見込める。

課題としては、伝統漁業の後継者不足や、これまでの景観を考えない開発による損失が指摘されている（今森光彦「里山を歩こう」）。

[参考文献・資料]

- ・針江生水の郷委員会 HP <http://www.geocities.jp/syouzu2007/>
- ・滋賀県 HP
http://www.pref.shiga.jp/imazu-pbo/soumu/miuziamu/08nen_html/081215_harie_kabata.html
- ・旅と散策 HP
<http://www.kansaihokenlife.co.jp/tabi/tabi2008/harie-syouzunosato.html>
- ・環境省 平成の名水百選 HP
<http://www2.env.go.jp/water/mizu-site/newmeisui/index.html>
- ・近畿農政局 HP
<http://www.maff.go.jp/kinki/kikaku/yutamura/18muradukuri/harieku.html>
- ・NHK オンライン HP <http://www.nhk.or.jp/special/onair/051015.html>
- ・素敵な宇宙船地球号 HP <http://www.tv-asahi.co.jp/earth/contents/osarai/0588/>
- ・京都新聞 <http://www.kyoto-np.co.jp/>
- ・近畿圏広域地方計画「本物を大事にし、本物を活かす文化首都創生プロジェクト」関西を

特徴づける「本物」のブランド化に向けた調査

<http://www.mlit.go.jp/common/000054277.pdf>

- ・今森光彦（2008）「里山を歩こう わき水の里から琵琶湖へ」岩波ジュニア新書